北海道新聞
2018年（平成30年）12月22日（土曜日）

新北海道ひと紀行

第14部 オホーツク・森に抱かれて ③

知床愛し10年目

オホーツク管内斜里町のガイド会社「知床山考舎」の伊藤典子さん(33)にとって、同町にある世界自然遺産・知床の景勝地、フレペの滝はお気に入りの場所の一つだ。

山から流れる地下水が約100㍍の断崖に染み出し、海に注がれる。森と海の接点と言える滝は12月、一気に結氷した。だが春、山の雪解け水で崖が潤い始めると、滝の谷間ではウミウが営巣を始める。冬眠明けのヒグマは山を下り、海で泳ぐことも。「季節が変われば動物も木々も全てが変わる。まさに自然の宝庫」と知床の魅力を語る。

神奈川県出身。幼少期、長野県で林業を営んでいた祖父の林を訪ねるたび、川魚を手づかみするなど自然とたわむれた。北大大学院で高山植物を研究中の2008年、環境省が知床のアクティブレンジャー（自然保護官補佐）を募集していることを知り、「世界に誇る自然を間近で見られる」と応募。採用が決まり09年春、大学院を休学して斜里に移住した。

知床の国立公園内の巡回や設備補修が主な業務だったが、毎日、足を踏み入れるうち手つかずの自然が凝縮されている知床に魅了されていく。11年に大学院を中退。レンジャーの任期を終えた13年に知床山考舎に入り、山岳ガイドとして奮闘する。

知床連山で登山の腕を磨き、国内外の名峰にも挑戦。今年5～6月には北米最高峰デナリに登頂した。13年には学生時代から興味があった狩猟免許を取得。知床の国有林で毎年シカ猟を行い、解体もこなせるようになった。「シカ肉のあっさりした味わいが好きです」。好奇心旺盛な「山ガール」の活動はとどまることを知らない。

知床では年間、約200人を案内する。当初は長居するつもりがなかった斜里での生活も、今年で10年目。「知床で見たいこと、知りたいことは全く尽きません」。そんな自然の奥深さを、ここを訪れる多くの人と共有していきたいと願う。

（大場俊英、若松樹）

伊藤（いとう） 典子（のりこ）

結氷したフレペの滝を望める遊歩道で、知床の魅力を語る
（いずれも岩崎勝撮影）

題字・